

要点録

会議名	令和6年度第1回 多摩市地域福祉計画推進市民委員会
日時	令和6年8月14日(水) 午前10時00分 ~ 午前11時50分
場所	多摩市役所西第1会議室
出席者	<p>【委員】室田委員長、鈴木副委員長、千葉委員、小山委員、荒井委員、中村委員、川辺委員、畠田委員</p> <p>【事務局】伊藤健康福祉部長、松崎福祉総務課長、川添福祉総務担当係長、関福祉総務担当係長、海老澤</p>
欠席者	なし
次第	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 今後のスケジュールについて</li> <li>2. 令和5年度取組結果の報告・評価方法の現状について</li> <li>3. ロジックモデル案（事務局作成）について</li> <li>4. 再犯防止推進計画の推進状況について</li> <li>5. 事務連絡</li> </ol>
会議内容	
事務局	<p><b>1. 今後のスケジュールについて</b>          (資料1に沿って説明)          委員からの意見なし</p>
委員 委員長 委員	<p>(資料1(別添)に沿って説明)          地域福祉活動計画の委員会の開催頻度を共有してもらいたい          昨年度は2回実施し、事業進捗状況を報告した。          その他、評価部会では、住民活動計画である現計画を、住民にどのように評価してもらおうかが懸案となった。評価部会の内容を委員会にも共有し、今年度中に市民アンケートを実施していきたいと考えている。</p>
事務局	<p><b>2. 令和5年度取組結果の報告・評価方法の現状について</b>          (資料2・3に沿って説明)          委員からの意見なし</p>
事務局 委員長	<p><b>3. ロジックモデル案（事務局作成）について</b>          (資料4に沿って説明)          ロジックモデルの導入を行うと、非効率的な事業や必要性に疑問のある事業の発見につながる場合がある。アウトカム指標に基づく評価は、成果につながっているかどうかを振り返り、事業を見直すきっかけになるものである。</p>
委員 事務局 委員 委員長	<p>障害者(児)福祉のロジックモデルの中で、美術展への来場者数はどこに矢印がつながるのか「大人の障害への理解が促進する」につながる。次回までに修正する。          評価部会時と比べて、ロジックモデルが分かりやすくなった。          事業全体は所管課しかわからないことが多いため、事業全体像が見えるためよい。          事業単体で見るのではなく、他の関連事業についても、職員と市民双方にとって整理がされてよいのではないかと。</p>

委員	<p>地域福祉活動計画においても、地域福祉計画のロジックモデルを参考にする。その上で、地域福祉活動計画に掲げる「6年後の目指す姿」に向け、住民にどのように評価してもらうかを検討していきたい。</p>
委員	<p>自身が運営するサロン「やどり木」を利用する障害を持つ子どもの保護者より、私立学校と都立学校で分断があるという話を聞いた。最近では、多摩中学校と桜の丘学園で交流があり、その後も交流できたという事例がある。</p> <p>また、保護者の悩みとして、18歳で自立しなくてはならないという意識があり、保護者の負担が大きい。</p> <p>仙川の kilig（キリグ）という音楽専門の放課後等デイサービスでは、運営者の子どもが自閉症を持っており、音楽が好きだが子どもを連れてコンサートを鑑賞できないため、自身でデイサービスを開設した。</p> <p>そうした障害を持つ人でも生きがいを見つけられるようにしていきたいと考えている。</p>
委員長	<p>成果をどのように捉えるかは、非常に難しい問題。福祉の取組は、費用対効果のみに着目することは危険である。客観的な評価は必要であるが、何をどこまで客観的に取り扱うかは慎重に扱うべきであり、事業によっては、参加者の主観的なデータで判断することが必要。</p>
委員	<p>ロジックモデルの概要を理解できた。</p>
委員	<p>ロジックモデルの中で、地域活動を行う人がどのように関わるかが重要である。以前は理想論が多かったが、施策の具体的な道筋や評価方法に議論が至ったことを評価する。</p>
委員	<p>障害者（児）福祉計画のロジックモデルにおけるアウトプットについて、どの程度の増加を目標とするのか。指標の設定がむずかしい。また、障がい者の外出促進については、増加要因が多岐にわたるため、多面的な見方が必要。</p> <p>多面的な判断を行おうとすると評価疲れが起きてしまうため、どのように単純化していくかについて、計画策定の段階でブレイクダウンが必要。</p>
委員	<p>どの程度の増加を目標とするのか、人口等の外的要因が変化していくため、設定が難しい。長期的に動向を追う必要があるため、数値目標を固めすぎるのではなく、都度アンケート等で測定することがよいのではないか。</p>
副委員長	<p>前提として、相当難しいことをやろうとしている。</p> <p>時間をかけて、勉強と改善をしながら、ゴールに向けて進めていけたらよい。</p>
事務局	<p>来年度の間見直しでは、評価方法の見直しが一つの大きな見直し内容となる。今年度に試行導入する2つの施策を基にして、対象を拡大していきたい。どの程度拡大できるかは未定だが、令和8年度以降は、従来通りの評価方法とロジックモデルによる評価を並行して行っていく。</p>
委員長	<p>多機関が協働する必要がある地域福祉計画においては、第三者が評価を行うのではなく、自らがロジックをもとに評価と改善を行うことが一番のポイントである。評価を行うことで、地域福祉が望ましい状態になったかどうかを確認できる状態まで持っていきたい。</p>

事務局	(資料5に沿って説明)
委員長	地域福祉計画以外でロジックモデルの導入を検討している計画はあるか。
事務局	正式に作成している計画はない。
委員長	福祉以外で導入を検討している部署はあるか。
事務局	東京市町村自治調査会が、行政評価の実施に関する調査研究を出しており、行政評価の必要性は浸透しつつあると考えている。
委員長	他部署からの抵抗はないか。
事務局	難しさを感じつつ、事業の振り返りやメリットを感じるという声は挙がっている。
<b>4. 再犯防止推進計画の推進状況について</b>	
事務局	(資料1に沿って説明)
委員	更生保護女性会で活動する中で、ハーフの方による犯罪が多くなっていると実感している。 今後もそうした住民の増加が想定される中、日本社会に適合できないケースが多くなってくると思うので、今後を見据えた対策が必要ではないか。
委員	人とのつながりによって更生するケース、犯罪しないケースも多くなるのではないか。 また、ルールや案内が周知されておらず、ごみの不法投棄や自転車の不法駐車をしているケースがあると聞いている。 認知症を持っている高齢者の犯罪にも留意する必要がある。
委員長	高齢者については、刑務所の方が居心地よく、再犯を繰り返してしまうケースもあるようである。地域で安心して暮らせることが必要であり、福祉と密接なかかわりがあるのではないか。
事務局	犯罪者は社会復帰し、地域で暮らしていくことになる。地域共生社会では、そうした犯罪者を地域で受け入れ、共に生きていくことが必要である
<b>5. 事務連絡</b>	
事務局	次回評価部会の日程や推進市民委員会の日程については、あらためてご連絡する。

以上